

てい かん こう  
**定刊弧光**    だいよんごう  
**第四号**

こうきょうこうつうきかん おも  
**公共交通機関に思いをはせる**

わたし きょうと いたみくこう む とちゅう の えき できごと わたし  
私が京都から伊丹空港へ向かう途中、モノレールに乗る駅での出来事だった。私はいつもの  
ように改札で「乗る際にスロープを留意してください」と伝えたと、駅員はきょとんとして  
いた。しばらくの間があり「段差は無いようにしてありますが、その他にお手伝いが必要でしょ  
うか？」と返事が返ってきた。私にとって電車に乗るときにスロープを出してもらおう事は、  
日常的にごく当たり前の感覚だっただけに驚いた。駅員の言葉のとおり、プラットホームの  
乗降口に傾斜が付いていて、ほとんど段差なくスムーズに乗れた。電車やバスは好きな時に、好  
きな所へ出かけるために使うものだ。バリアがあってスロープを出してもらわないと乗れない  
というのはやはりおかしい。モノレールでの出来事を目のあたりにし、これは単なる設備的な事  
なので、全ての駅はこれを目指してほしいと思った。そしてその設置は公共交通機関にとって  
の義務だろう。

せんじつ くるま ゆうじん の かわれ お うんてんしゅ あわ  
先日、車いすの友人とバスに乗っていた。彼がバスを降りるとき、運転手は慌てふためいて  
いたのだ。私は気にせずバスを降りたが、運転手は乗降時にニーリング（車高を下げる機能）  
をしていなかったのだ。ノンステップバスでもそれを行わない場合スロープは急傾斜となり、  
大きな段差ともなりうる。その友人が「降りるのに危険を伴うのでニーリングしてください」  
と要求し、運転手は「分かりました」と返答したがなおも慌てふためいていた。私はそのこと  
が非常に目についたので、この時は運転手が置かれている状況を冷静に考えてみた。運転手は  
見るかぎり高圧的な人ではなく差別的な態度を取る人ではなかった。運転手にしてみたら悪意が  
ある訳でもない。そして研修を受け動作や心得は多少有るはずだ。その上でなぜあのような  
状況になってしまったのか？

ひじょう なか こんざつ じょうきやく うおうさおう くるま じょうこう みまも  
非常にバスの中が混雑しており、乗客も右往左往しながら車いすでの乗降を見守っていた。  
そんな状況での運転手に襲いかかるプレッシャーはいかほどのものなのだろう？ ダイヤの  
順守、スムーズな乗降、他の客から向けられる視線。こんな状況下で他人の心模様まで考  
えて動けるだろうか？ 私は運転手に怒りを向けることが多いのだが、このように考えると  
運転手やバス会社だけに改善を要求しても状況が全て変わる訳ではないのだと気付いた。つ  
まり、そこに同乗する客、介助者の立ち振る舞い、社会の障害者への認識など様々な環境を  
変えなければかわらないということでもある。

せっきよくてき い わたし よ い のそ たほうめん わた はたら か  
より積極的に言えば、私たちがより良く生きることを望み、多方面に渡って働きかければ変  
えていくという事もできる。今回の出来事を通じてその場の現象だけでなく、広い視野を持っ  
て、交通アクセスの改善運動に取り組みたいと思った。    ぶん か こ  
（文：加古ゆういち）

## シンポジウム『自立生活センターの歩み』

### ～これまでの記録と記憶。これからの希望

10月24日土曜日にハートピア京都において、アーク設立1周年を記念してシンポジウムを開催しました。シンポジストとして「くにたち援助為センター」代表の安積遊歩さんと「立命館大学大学院」教授の立岩真也さんを招き、各地方からの大勢の参加者により会場は溢れんばかりの盛況となりました。

第一部では、安積遊歩さんに基調講演をして頂き、彼女の半生を交えながら、自立生活運動との関わりや、彼女がアメリカに渡り自立生活センター（以下CIL）の何に衝撃を受け、何をどのように学び日本へ持ち帰ってきたのか、CILが日本に初めて立ち上げられた頃の自立生活運動の先駆者としての当時の出会いや思いを語ってもらいました。

その中でも、彼女がアメリカ（カリフォルニア州バークレー）に渡って、アメリカの障害当事者のありのままに生き生きと過ごしている姿に衝撃を受けたという話は印象的でした。その頃の日本では、障害は克服して本人の努力により健常者に近づくべき事とされ、多くの障害者はリハビリ漬けの日々を送り、頑張っただけでも長く歩き、自力で車いすを動かす事を強要されていました。私自身も施設（病院）ですとそう言われ、リハビリに反抗し苦しむ過ごしていた日々を思い出して心に熱いものを感じていました。

そういった話を通じた中で、過去からずっと障害者が排除され続けられた歴史があり、その頃それを打破するための命がけの障害者運動が行われ、過激と言われても強烈に自己主張をしなければ切り捨てられてしまう社会であったことがビシビシと伝わって来ました。障害者運動を担う事がCILに最も必要とされている事だと再認識し、身が引き締められました。

第二部では、安積さんに立岩真也さん、アーク代表の岡田を加えトークセッションが繰り広げられました。その中で立岩さんが話された所得の再配分の考え、ベーシックインカムという事柄があり、それは全ての人に無条件に一定の所得が与えられる制度であり、それはシンプルに言うと多く稼いでいる人から多く税金を集め、少ない所得の人に所得が再分配される仕組みです。福祉にお金がかかるか、財源をどうするか？と議論が色々されていますが、こういった斬新的な切り口で社会を変えたら色々な問題が解決するのではないのでしょうか。

こういった新しい考え方を持って今後の社会変革をしていく必要がある一方、それは一体どうやって形にしていけるのか？と難しさも感じました。しかしながら、今を精一杯生きその姿を多くの人に伝え、私たちがよりよく生きていくとメッセージを発し続ける事は出来る。過去・現在・未来と変わることはありません。障害者運動にはそれを実践してきた歴史があります。そして、この一時期を我々も担っているのも確かです。（文：加古ゆういち）



しつぎおとうばんがいへん  
一 質疑応答番外編 一

しゅうばん しつぎおとう じかん もろ ざんねん かた  
シンポジウムの終盤に質疑応答の時間を設けていたのですが、残念ながらパネリストの方にお  
こた  
答えただけなかったものがありました。しかし、後日、パネリストの安積さんに返答できな  
しつもん こた  
かった質問にお答えいただきましたので、このページに掲載いたします。

いちばんいんしゅう のこ がいこく おし くだ  
Q. 一番印象に残った外国と、エピソードを教えてください。

いんしゅう のこ くに くにくに まず こども  
印象に残っている国はインドやフィリピン、アフリカのエジプトです。それらの国々では貧しい子供  
たち ひっし じぶん いのち じぶん まも いぬ こどもたち なに で き おも  
達が必要に自分の命を自分で守ろうと生き抜いていて、その子供達に何か出来ないかという思いが、  
しょうがい も こどもたち おうえん そしき かい つく  
フィリピンの障害を持つ子供達を応援する組織「バタバタの会」を作りました。  
こ しょうがくきん しょうがい と こどもたち おく そしき つく  
その後いろいろあって、奨学金を、障害のあるなしに問わず子供達に送る組織を作りました。しか  
いま ひと まか ちよくせつ しえん ちゅうこ いふく など ねん かい おく  
し、今はその人に任せて、直接の支援は中古の衣服やおもちゃ等を年に4、5回フィリピンに送る  
せいこ かげつ あか だ あ まず く  
ことをしています。フィリピンの生後8ヶ月という赤ちゃんを抱き上げたとき、あまりの貧しさから来る  
えいようふりょう すわ め い わたし  
栄養不良で、座ることもせず目だけがぎよろぎよろとなっていました。それでも生きようとして私  
て かし ひっし と た すがた いま わたし きょうれつ い おも  
手から菓子パンを必死に取って食べていた姿は、今でも私を強烈にフィリピンに行かねばという思  
げんてん  
いの原点です。  
じゅうだい わか ははおや せいこ さい あか ほう だ わたし かね せま  
インドでは、十代の若い母親が生後2才くらいの赤ん坊を抱いて、私に「お金をくれ」と迫ってき  
すがた わす つら しょうきょう すこ かね こどもたち  
た姿は忘れられません。あまりにも辛い状況に少しお金をあげたら、そのあとからどんどん子供達  
かこ いま おやこ ひっし ほうぜん ひょうじょう  
に囲まれてしまったこともありました。今でもあの親子の必死の、それでいながら、呆然とした表情  
わす  
が忘れられません。  
す ば やま うえ こどもたち なか さい あに さい  
エジプトでは、ゴミ捨て場の山の上でゴミをあさっていた子供達、その中でも7才くらいの兄と4才く  
いもうと なかよ ひっし こころ や つ ふたり やま うえ た もの さが  
らいの妹の仲良しさと必死さが心に焼き付いています。2人はゴミの山の上で、食べ物を探してい  
けいかん く わたし まえ て ひっし はし さ い  
ただけなのに、警官が来ると私の前を手をつないで必死に走り去って行きました。  
おやこ かいじょしや て つ こ  
そのほかにも、ヨーロッパでさえイタリアではジプシーの親子に介助者がポケットに手を突っ込まれ  
ひっし ふ はら に や まえ こじき  
て、必死に振り払って逃げたことがあったし、スペインのパン屋さんの前で乞食をしていた、ボロボロ  
ふく き おんな こ ひょうじょう わす  
の服を着た女の子の表情も忘れられません。  
せかい ちい こどもたち しあわ い けんり じんけん むし すす  
この世界は、小さな子供達の幸せに生きる権利を、人権をほとんど無視して進んでいるのだなという  
くに い み  
のが、どこの国に行っても見えてしまいます。  
わたし ちい おとな とく いりょう きょういっかんげいしや め こどもたち  
私は小さなときに、大人たち、特に医療や教育関係者からひどい目にあってきたので、子供達のこ  
き おも しょうがい も ひと くに こえ うば こどもたち  
とがこんなに気になるのだなと思っています。障害を持つ人はほとんどの国で声を奪われ、子供達と  
おな あつ き なか なに で き なに じく こうどう  
同じように扱われて来ました。そんな中ではありますが、何が出来るか、何をしたいのかを軸に行動し  
つつ  
続けてます。



じ つづ  
次ページに続きます

あさか とうじしゃしゅたい じしん とうじしゃしゅたい まも ため くふう  
Q. 安積さんにとって当事者主体ってなんですか。ご自身のセンターで当事者主体を守る為にどんな工夫をされていますか。

わたし わたし とうじしゃしゅたい まも さいだい くふう きぼ おお  
私のセンターで、私がしている当事者主体を守る最大の工夫は、規模を大きくしないということで  
しせつ しせき ひにんげんか きぼ おお うんえい むすか  
す。施設やいろいろな組織がなぜ非人間化していくかということ、規模が大きくなればなるほど運営が難  
かんり せんこう ひつよう そしき とうじしゃ ごえ はんえい  
しくなり、管理が先行していきます。必要とされている組織ではありませんが、当事者の声を反映させ  
ちい きぼ つく あ いちばん おも くにたち じんこう  
ていくには、小さな規模のものを、たくさん作り上げていくのが一番だと思います。国立は人口も7  
まんにんたい ぎょうせい く すず とうじしゃ ば  
万人台なので、行政ともパートナーシップを組みながら進めていっています。当事者があらゆる場  
で い はつげん じゅうよう ぎょうせい かいぎ かが しちよう しきかいぎいん  
に出て行き発言することが、重要なので行政のさまざまな会議にも関わり、市長や市議会議員ともい  
かんけい つく どりよく  
い関係を作ろうと努力しています。

じりつ やくいん かいじょしゃ せいかつ あんてい しかく と ひつよう  
Q. 自立センターの役員をしています。介助者の生活を安定させるために資格を取ることが必要になっ  
ねんまえ かいじょしゃ こと つね せんもんか たちば と ひと おも  
てきました。しかし30年前の介助者とは異なり、常に専門家としての立場を取る人がふえたように思  
せんもんか なん わたし ぶくしがく べんぎょう とうじしゃ ひじよう  
います。いったい、専門家とは何でしょうか。私は福祉学の勉強もしてきました。当事者としては非常に  
いわかん かん いけん き  
違和感を感じています。ご意見が聞きたいです。

わたし とうじしゃ せんもんか かんが ひとりひとり じんせい ひと  
私は当事者こそが専門家であると考えています。つまり、一人一人の人生は、その人がまずリーダ  
ーシップをとるべきです。いわゆる世間が言うところの専門家は、私にとって私のリーダーシップを  
せけん い せんもんか わたし わたし  
サポートする人に過ぎません。あくまでも自己決定をよりよく援助するための情報提供者であ  
ひと す じこけつてい えんじょ じょうほうていきょうしゃ  
て、まるでその人の人生をコントロールする人であってはなりません。しかし、情報提供者という点  
ひと じんせい ひと じょうほうていきょうしゃ てん  
もまた難しく、正しい情報を得るには自分で追求する力が必要なわけです。たとえば、障害を持  
むすか ただ じょうほう え じぶん ついきゅう ちから ひつよう しょうがい も  
つ子の親が子供の障害を軽くしてあげたいと思って、専門家の進めるままに治療をすれば、親  
こ おや こども しょうがい かる おも せんもんか すず ちりょう おや  
はまず子供のリーダーシップを奪っているという自覚を持つべきです。しかし、この世界では、それは  
こども うば じかく も せかい  
ほとんど不可能です。なぜなら、親は子供を愛しているのだから、子供のためにすることは正しいとみ  
ふかのう おや こども あい こども ただ  
なされてしまっているからです。そうした中、専門家が正しくも無い実験的な情報を提供すること  
な せんもんか ただ な じっけんてき じょうほう ていきょう  
はしょっちゅう起こっています。なぜなら、専門家も生活をしていかなければならないので、お金を得  
せんもんか せいかつ かね え  
るために、もう一つは、功名心や野心のために正しくない情報でもそれを必要としていると思込  
ひと お ひと じょうほう ひつよう おも  
んでいる人に押し付けてしまうことがしょっちゅうあります。  
せんもんか ひと ひとりひとりよ ひと ちい ぎょうそう い  
専門家の人たちももともとは一人一人良い人です。ただ、小さなときから競争させられまくって生き  
ひと たす ひと せいじょう きょうふ ただ しこう ほうがい ただ  
てきたので、人を助けてあげたいという以上に、さまざまな恐怖に正しい思考が妨害され、それゆえ正  
さべつてき つく た しん げねつざい とく  
しくない差別的なシステムを作り出しています。たとえば、新インフルエンザのワクチンや解熱剤、特  
しよほう あぶ じょうほう もと え  
にタミフルの処方が多量に危ないかという情報は、求めなければなかなか得られません。しかし、  
はんたい う ほう き せんもんか ちから ま ち  
反対に、ワクチンを受けた方がいいとか、タミフルは効くとか、いわゆる専門家の力で巻き散らかさ  
せいやくがいしゃ もう じぶん じぶん じんせい せんもんか じかく  
れ、製薬会社が儲かるというシステムがあります。まず自分が、自分の人生の専門家であるという自覚  
も じぶん いのち じんせい たいせつ じょうほう ひつよう  
を持ちましょう。そうすれば、自分の命と人生を大切にするために、どんな情報を必要とするのか  
かいじょしゃ いしゃ けんきゅうしゃ せんもんか かんが ひと  
おのずと見えてきます。介助者も、医者も、研究者などのあなたが専門家と考えている人たちは、  
わたしちしやうがいしゃ そんざい しごと い み わたしたち かれ  
私達障害者の存在なくして、その仕事の意味をまったくなくなくなります。私達こそが、彼らの  
けいざい せいぞん ささ きせん た ただ ゆうよう じょうほう え  
経済や生存を支えるリーダーなのです。毅然と立って、正しく有用な情報を得ていきましょう。

あさか  
安積さんありがとうございました。

## どいとおる カメラマン土井亨 シンポジウムレポート

かこ みらい むす め  
過去と未来の結び目に・・・

こんかいわたし きろくはん かいじょう すみ み わたし  
今回私は記録班として会場の隅でシンポジウムを見ていた。私はアークスペクトラムで  
かいじょぎょうむ たすさ いっぼう かつどう しぜん さつえい  
介助業務に携わる一方、カメラマンとしても活動しているため、自然とビデオ撮影をまかされ  
ることになったのである。

しゅうばん かいじょう らいじょう きょうとし しやうがいほけんふくしか かた にぎ  
シンポジウムの終盤、会場に来場していた京都市の障害保健福祉課の方がマイクを握った。  
ぶぶんてき ころえん しやうがいしや きやうせい たいりつ かた ちやくこ ばめん はなし  
部分的ではあるが講演で障害者と行政との対立が語られた直後である。あの場面で話をすることは  
しやうがいほけんふくしか かた けつ いごころ かね かわれ  
障害保健福祉課の方にとっては決して居心地のいいものではなかつたろう。しかし彼はまっすぐ  
ぶたい みす はなし はじ しせん さき あさか おだ やさ ひやうじやう  
舞台を見据えて話を始めた。その視線の先では、安積さんがとても穏やかに、優しい表情をしてい  
た。かのじよ ひやうじやう み しゆんかん わたし いしき とお はな しやうかんまえ て あ ばめん おも お  
た。彼女の表情を見た瞬間、私の意識は遠く離れ、2週間前に出会ったある場面を思い起こして  
いた。

しやうかんまえ わたし ちゆうごく なんきん にほんぐん おか なんきんだいぎやくさつ  
シンポジウムのちょうど2週間前、私は中国の南京にいた。日本軍の犯した南京大虐殺と  
くら れきし かか まち せんそう かか ひとびと しゆざい しゆざい すず  
いう暗い歴史を抱える街。そこで戦争のトラウマを抱える人々を取材していた。取材を進めてい  
なか なんきん わか がくせいたち せんそう のこ つめ くる し かわれ  
く中で、南京の若い学生達が戦争の残した爪あとに苦しめられていることを知った。彼らはもち  
ちやくせつ せんそうたいけんしや かこ れきし お ひ かな にく いた かわれ  
ろん直接の戦争体験者ではない。しかし過去の歴史から尾を引く悲しみ、憎しみ、痛み・・・彼  
せいかつ なか くらうき しせん そんざい こきゆう たび かわれ なか し  
らの生活の中で、空気のごく自然に存在していて、それは呼吸をする度に彼らの中に染み  
こ かわれ にちじやう しんしよく れきし たたか  
込んでいた。彼らにとっては日常こそが、侵食される歴史トラウマとの闘いであ  
った。

なんきん たいざいちゆう かが ひとびと む じぶん  
南京に滞在中、『カメラマン』としてトラウマを抱える人々にレンズを向けながらも、『自分』  
はどのように過去の歴史問題に対峙すればいいかがわからなかつた。そんな中、取材したある  
ちゆうごくじん い ことば わたし かつどう と にほんじん  
中国人が言ってくれた言葉が私の葛藤を解きほぐしてくれた。「日本人のあなたにとってここ  
いごころ わる わたしたち れきし つく うえ  
はとても居心地が悪いでしょう。しかしこれから私達がともに歴史を作っていく上で、あなた  
がこの場にいてることに大きな意味を感じます」

せんそう れきし しやうがいしや たたか ひび かんたん かせ どうじしや  
もちろん戦争の歴史と、障害者の闘いの日々を簡単に重ねあわせることはできない。しかし当事者  
たつ もんだい む あ しせい わたし ぶん かん こと たちば ぶんか れきしたいけん も ものたち  
達の問題に向き合う姿勢に私は深いつながりを感じた。異なった立場、文化、歴史体験を持つ者達  
む あ かんたん てきたい かな おそ かんたん  
が向き合えば、簡単に敵対できてしまう。悲しいけれど恐ろしいほど簡単にできてしまう。その  
てきたい かこ おお たいりつ かつどう う し とぎ たいりつ わたしたち  
敵対が過去に多くの対立や葛藤を生んできたことも知っている。だけど、時に対立しても私達は、  
わたしたち もんだいかいけつ ききゆう どうし  
そう『私達』はともに問題解決を希求する同志でもある。

シンポジウムには『これまでの記録と記憶。これからの希望』というサブタイトルがつけられ  
ていた。あの日、あのシンポジウムで、異なる立場であっても、同じ問題に共に向き合うことが  
できた。それはこれからのつながる希望なんじゃないだろうかと思う。『私たち』は時に対立し  
きぼう おも わたし とぎ たいりつ  
たとしても、問題を過去に置き去りにしたり、未来に投げ捨てたりしない。その思いに勇気づけ  
もんたい かこ おお ざ みらい なす おも ゆうき  
られたのはきっと私だけではないだろう。  
わたし ぶん どいとおる  
(文：土井亨)

## かいじよときどきやす けんしゅう 介助時々休み、ときどき研修

じりつせいかつ い か しーあいえる かいじよこころえ かいじよぎじゆつ こうじょう  
自立生活センターアークスペクトラム（以下CILアクスぺ）では、介助心得・介助技術の向上  
を目的としたワークショップ形式の介助者向け研修を実施しています。今回は「コミュニケー  
ション」がテーマです。自分の気持ちに向き合い感じることや、相手を信頼し傾聴でき対等  
であることをねらいとしています。

がつ にち ど おこな けんしゅう たいよう しょうかい  
さる11月28日（土）に行われた研修の概要をご紹介します。

### ■自分の気持ちに向き合う。

こんかい けんしゅう あいて たい じぶん つた かつち しんこう  
今回の研修では、あるテーマをもとに「相手に対し自分を伝えていく」という形で進行しま  
した。前半冒頭には「自分の得意なこと、不得意なこと」を出し合い、何故それを伝えあつたの  
かが話されました。今回参加した介助者には、得意とするものを列挙するよりも不得意とするも  
の・苦手とするものの方が多くに気付いた、そう感想を漏らす人がいます。確かに、私  
たちは得意な部分を伸ばすよりも、不得意や苦手な部分を補完することで完成された人間を目指し  
てきたかもしれません。そのように理解すれば、そのような感想を漏らすのも、あるいは不完全  
な人間であり続けていると思ひ込むのも無理のないことです。ある参加者は、自分の不得意や  
苦手な部分を知ったので、それをなくすよう努力していきたいと答えてくれます。その言葉を聞  
いた時、自分を変えていきたいと伝えるのは勇気のいることでまさに宣言なので、ただ素晴らし  
いと感じる反面一抹の寂しさも覚えました。「自分を変える力は自分のために使う」その疑い  
ようのないことが疑いなく起ころうとしていたからです。

### ■チームワークの強みとして、自分の気持ちに向き合う

けんしゅう こうはん じぶん きもちむあ  
研修の後半では「この仕事をするきっかけ」「この仕事をするまでの自分・この仕事をしてか  
らの自分」「どんな団体にしていきたいか」を出し合う中、人を大切に出来ない職場での過酷な  
労働実態、ただただ人の役に立ちたいと思った等こもごも語られ、介助者として働いてきた動機  
をはじめ聞く機会ともなり、お互い真剣に耳を傾けていました。研修の最後、話を聞きあ  
う時間を保障し合ったことの意義が強調され、それに関わって自分を変える力を自分のため  
だけに使わず人におす分けしたらどうなるか。もし「僕（私）はそれがとっても不得意で苦手  
なのでサポートして下さい」と伝えたらどうなるか。それは「サポートを求める力＝あなたの力」  
にもなり、また「サポートをする力＝あなたの力」にもなりうると話されました。そのような  
団体の一員であり続けるという大局にだって仕事に取り組んで欲しい、そう締めくくられまし  
た。

ぶん けー  
(文：k)



# かいじょしゃ 介助者リレートーク



だい そうしゃ のまのふみお  
—第4走者 野間野文男—

このページではアクスペで働く介助者をリレー形式でご紹介していきます。  
今回は第4走者、野間野文男さんです。

かいじょしゃ こんかい うと のまのふみお もう しゅっしん きやうとふ  
介助者リレートーク、今回のバトンを受け取りました、野間野文男と申します。出身は京都府  
みやづし げんざい さい  
宮津市、現在25歳です。

さてこの原稿を書いている今は、12月も半ばにさし迫ろうという時期なのですが、定刊弧光  
だいよんごう はっこう みな てもと とど ごろ とし せ としあ  
第四号が発行され皆さまのお手元に届くのはいつ頃になるのでしょうか？年の瀬か、年明けか、  
いずれにしても一年の節目となる時期ですね。

さ いちねん はんせい むか いちねん ほうふ よ きかい ぼく ひと ば  
去りゆく一年を反省し、これから迎える一年の抱負をかかげる良い機会です。僕も一つ、この場  
をお借りしてやってみましょう。

アクスペでのこの一年を振り返ると、コーディネーターという役職についてから、めまぐるし  
く自分も周囲の環境も変化しました。コーディネーターとは介助者と介助利用者の間の橋渡し  
となる役割です。その役割を怠ると、介助者の仕事・障害者の生活の両面に支障をきたしてし  
まいます。そのようなことにならないように、慣れないながらもコーディネーターという仕事に  
全力をつくしていました。…というより、今現在も全力をつくしています。実はコーディネ  
ーターの役割についたのもごく最近のことで、皆の力を借りながら、なんとかやっているのが  
現状です。

そういうわけで、僕にとっての2009年は、反省しようにもまだ振り返る心持ちになっていま  
せん。過去を振り返らず、前のめりに新年に突入していきます。

そういうわけで、年が明けてもしばらくはノンストップで走り続けるつもりです。とはいえ、  
ずっと走り続けるわけにもいきません。少しは立ちどまって、まわりを見回す余裕を持てるよ  
うになることを、来年の目標にしようと思います。

普段の僕は、バンド活動を趣味にしており月に1、2回、ボーカルやドラムでライブを行って  
います。前回のリレートークで緒方さんより、ライブの様子をレポートするよう頼まれたので  
すが、文章ではなかなか表現しづらいものです。なので、実際に見に来てもらうのが一番伝わり  
やすいと思います…。とさりげなく宣伝しておきます。

野間野のいつもと違う一面を見たい方は、ぜひ。

さて、次回のリレートークですが、いつもこの機関誌の編集をやってくださっている、岡本雅  
博さんをお願いします。岡本さんの普段の生活と、編集の立場から「将来こんな機関誌にしたい！」という展望も語っていただければと思います。

## 連載コラムことば草



### 一領域の外の「わたし」-

一人称の人代名詞は「わたし」、「ぼく」、「おれ」、「うち」エトセトラ。etc.

一人称視点の小説にはどの人称が使われることが多いのか。統計がとられているかは不明だが、「わたし」が一番多いのではないだろうか。これまでの既読本数の少ない私が言うのもおこがましいが。人代名詞は様々な種類がある。しかし実際は、時代の流れで変わりゆくもの。多少イメージが異なるだけで、たいして意味が変わることはないだろう。

その代名詞が指すものは、人生の主人公、自分自身だ。誰も、生まれてから成長していく中で、自分を認識し「わたし」ができあがっていく。「わたし」は知覚を介して、知り、考え、行動する。その経験の積み重ねが個性であり、それが「わたし」だ。

調べると、現在世界人口は68億人らしい。その分だけの「わたし」がいるということだ。「わたし」は本人にとってはひとりしか示さない。すると必然的に、他の「わたし」は二人称の「あなた」、「きみ」、三人称の「彼」、「彼女」、「あのひと」と呼ぶことになる(当たり前のことだが)。それは、自分以外の他人ということ。

「わたし」自身は比較的容易に理解できる(逆にできないことも多分にあるが)。一方、「あなた」を認知することはできるし、知ろうとする方法はあるが、真に「あなた」を理解することは不可能だ。人には、他人の意識や知覚と共有する機能はないのだから。そこで、人はそれまでの経験を用いて、他人を理解する。「あいさつをするからやさしい人だ」「ピアスしているから悪い人だ」など、今まで出会った人や起こった物事との共通点を見つけて判断する。これは人間の心の働きで自然なことだ。

しかし、時にその判断が、溝を生むことがある。「わたし」が「あなた」を知ろうとする前に、経験が先行して決め付け、関係をこじらせてしまうかもしれない。多くの経験を積んで自信を持っている人、あることに嫌悪感を抱く人、単に性格が頑固な人が、このような人たちが溝を生むとして思い浮かぶが、現実には誰も体験することだ。このような場合、片方が歩み寄る柔軟さを持ち合わせなければならぬ。双方がかたくなだと、関係がただ悪化する。「あの団体所属だから、話をしてもらっても無駄だ」、「あいつは若いからできるはずがない」と言って、相手を知らないで行動すらしなないこともあるだろう。

個人レベルで深い溝が生じるのだから、それが集まった集団同士となると、なにかから手を付けたらいいのだろうか。絡まった糸を解くには労力がある。変える必要があるのなら、辛抱強く行動しなければならぬ。糸を捨ててしまえば何もかも終わってしまう。

人が生きていく中、経験はとても大切で重要だ。しかし、時にはマイナスの作用をすることがある。経験で判断することは通常の心理だが、他人が「わたし」の領域外の「わたし」であることも常だ。自分以外の「わたし」を知っていると、少し世界の映り方が変わるかもしれない。

(文：岡本雅博)





# アークスペクトラム かつどうきろく 活動記録

2009年9月～2009年12月

10月14～16日：岡山にブロック研修へ行きました。

10月24日：シンポジウム「自立生活センターの歩み」  
～これまでの記録と記憶。これからの希望～開催

10月26日：正社員募集にて仲間が増えました※現在正会員19名

11月3～7日：山形のピアカウンセリング講座にリーダー派遣

11月28日：ワークショップ～コミュニケーション編～実施

11月30日：アークスペの体験室始めました。

12月16日：アークスペ事務所にて新人歓迎会を実施

12月22日：アークスペ事務所にて忘年会を実施

12月30日：機関紙「定刊弧光：第四号」発行





## じりつせいかつ      かいいん      だいほしゅう 自立生活センターアークスペクトラムの会員を大募集！！

わたしたち      かつどうしゅし      さんどう      にゅうかい  
私達の活動趣旨に賛同のうえ、入会ください。

かいいん      きかんし      かくしゅ      さそ      じょうほう  
会員になると、機関誌、メーリングリスト、各種イベントへのお誘いなどいろいろな情報  
をお届けします。

しきんめん      えんじょ      さんじょかいいん      きかんし      こうどく      どくしゃかいいん      だいほしゅう  
また、資金面で援助していただける賛助会員や機関誌を購読してくれる読者会員も大募集  
します。

- いっばんかいいん      ひとくち      えん      きかんしこうどくりょうふく  
・一般会員：一口 3,000円（機関紙購読料含む）
- さんじょかいいん      ひとくち      えん      きかんしこうどくりょうふく  
・賛助会員：一口 3,000円（機関紙購読料含む）
- きかんしどくしゃかいいん      ひとくち      えん  
・機関誌読者会員：一口 500円

かいひ      ぶりこみ      きぼう      かた  
会費の振込みを希望される方は…

⇒ ⇒      ゆうびんぶりかえこうざ  
郵便振替口座：00930-5-321253

かにゅうしゃめい      じりつせいかつ  
加入者名：自立生活センターアークスペクトラム

ぶりかえようし      ひつよう      かた      きがる      もう      つ  
※ 振替用紙の必要な方はお気軽にお申し付けください。



### へんしゅうこうき 編集後記

この場所をもって皆様言葉表現できる事を幸せに思っております。今後、編集に新しく携って  
いかせてもらう事となりました、信川秀宇と申します。よろしくお願い致します。

早いもので今年も残すところが僅かとなってきました。アクスぺにとって今年的一年は本当に長く、大き  
な意味を持った年になりました。編集された後の定刊弧光四号を見て改めて感じています。今回の定刊  
弧光ではやはり10月24日に開催された団体初主催のシンポジウムの事をいま一度、振り返った形にな  
ったかと思えてとれる内容となりました。各々方の思いや視点を感じさせる部分があり、特にQ & A形式の  
ものが印象的であり、シンポジウム当日の光景が浮かびます。皆様の心にも何かを提起する内容ですの  
で是非、自分自身と対話をして頂ければ幸いです。「社会のあり方に猜疑しながら、より良い社会を自分  
の中でまず見つけていく。そんな大きな事を・・・とと思っている事も変わる日はきっと来る。」個人的には  
そんな事を思いながらこの場所に言葉をのせてみました。

アクスぺはこれまでと同じ様に皆様に温かく見守られ成長を続ける事になるかと思えます。皆様の自  
に、心にアクスぺの流れが感じられるような機関誌にしていけるよう尽力させていただきますのでこれから  
もよろしくお願い致します。  
(文：信川秀宇)

へんしゅう      じりつせいかつ  
《編集》 自立生活センターアークスペクトラム

きょうとうしゅうきょうくさいいんたいらまち      さんき      かい  
〒615-0022 京都市右京区西院平町6 三喜ビル1階

TEL・FAX：075-874-7356      MAIL：cil-arcsp@rg7.so-net.ne.jp

URL：http://2nd.geocities.jp/cil\_arc\_sp/